

### 第3節 「想像力」をはぐくむことばの連携指導

光野 公司郎・高梨 珪子・福崎 淳子

#### 要約

「思考力」をはぐくむためのことばの力について、『幼稚園教育要領』の領域「言葉」と『小学校学習指導要領』「国語科」をもとに具体的に考察した。実際の指導は、第2節に示したものと同様である。

#### キーワード

想像力、物語、同化、演じること、幼小同一教材

## 1. 小学校第1学年「国語科」ではぐくむ想像力

### (1) 「場面の様子」について「登場人物の行動を中心に」「想像を広げながら」読む力

本節では、「想像力」を支えることばの力をはぐくむための幼小連携の在り方について考察していくものとする。

第1節で、『幼稚園教育要領』領域「言葉」の「ねらい」「内容」及び『小学校学習指導要領』「国語科」の第1学年の「目標」「内容」を示した。「想像力」について考えていくために、まずはこれらを分析的にとらえて関連づけていく必要がある。

第1学年「読むこと」の目標(3)を受けた「内容」には、

ウ 場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと

とある。「場面の様子」について「登場人物の行動を中心に」「想像を広げながら」読んでいけるようにすることが、第1学年ではぐくむべき「想像力」であると言える。この「想像力」は、小学校では、領域「読むこと」において、文学的な文章を読む活動をとおしてはぐくんでいくことになる。

文学的な文章を読むということは、以下のような意義がある。

文学を読むということは、言語による虚構世界を生きる行為である。私たちは、未だ知らない場(時・所)への好奇心から読み始める。おもしろさに惹かれて読んでいくうちに次第に人間の深いところが開かれていって、人生の味わいを深くする。その喜怒哀楽のプロセスと結果によって、心が癒され、人間認識のより高いより深い世界へと進み出ていく。そのとき私たちは、登場人物と共に生き、それまでの自己を何らかの意味で否定し新しい自己の成長を実感している。出会いによる衝撃は、劇的に人生観を覆すものであったり、静かに沈潜していった緩やかに自己再生を促していくものであったりする。<sup>(1)</sup>

第1節において、「想像力」(「想像する力」)の定義は、「経験していない事柄や現実には存在していない事柄などをこうではないかと推し量り、頭の中でそのイメージを自由に思い描くことのできる力である」と示した。文学的な文章という「虚構の世界」で、「登場人物と共に生き」ることをとおして「自己の成長」を実感していくためには、まさに、「想像力」が必須になってくるのである。

教育においては、この「想像力」を発達の過程に即してはぐくんでいくことにより、その過程ごとに適した文学的な文章を読むことができる(聞くことができる)ようにしていくことが目的

## 第2章 未来型のこどものことばの発達 と促進法

になってくる。そして、そのような教育を積み重ねることによって、将来的には自立した読書人が育成されていくことになるのである。

具体的には、第1学年の領域「読むこと」の文学的な文章に関する「言語活動」として、「物語を演じたりすること」が明示された。実際の指導においては、「物語を演じたりすること」とおして、この能力をはぐくむということになる。

### (2) 「物語」と「場面」

「物語」とは、文学的な文章の中のひとつの文種であり、語り手が口伝えに語ることが原点となっているものである。そのため「物語」には、文学的な文章の要素が簡易化・単純化・典型化して表現されている。具体的には、登場人物は個性が放棄され象徴として描かれること、ストーリーの進行が出来事の筋のみでできあがっていること、主題がストーリーに仮託されてしることなどが挙げられる。つまり、「物語」は、将来的に文学的な文章を自立的に読んでいけるための能力をはぐくんでいくための導入としてふさわしい文種であると言える。

市毛勝雄は、文学的な文章の指導は「登場人物の変貌に着目させる」ことが最も基本的なものになるとし、さらに「登場人物の変貌に着目させるという指導は、文学作品の構成そのものにつかえようとする意図を秘めている」<sup>(2)</sup>と論じている。そして、上記のように「ストーリーの進行が出来事の筋のみでできあがっている」ような「物語」については、「物語の基本形」となる構成があるとし、以下に示す「初め—中—終わり」という三つの要素を具体的に示した。

初め — 中心人物の初めのイメージ

終わり — 中心人物の最後のイメージ

中 — 変化の要因<sup>(3)</sup>

この構成要素は、第1学年で学ぶ「場面」のことである。「物語」とは、主人公の初めのイメージを表している第1場面、「変貌」した最後の主人公のイメージを表している第3場面、そして「変貌」の要因となった出来事・事件をあらわしている第2場面という三つの「場面」を基本としてストーリーが構成されている文学的な文章なのである。

さらに、市毛は「人物像の変化の理由を考えさせると、物語のテーマ、主題を考えさせたことになる」<sup>(4)</sup>とも言及している。つまり、「中」としての「変化の要因」の中に、物語の主題が仮託されているということである。

### (3) 「物語」のことば

当然のこととして、「場面」はことばで表現されている。「物語」のような文学的な文章に用いられることばは、解釈の幅が広く、状況（文脈）によって適切に解釈していく必要があるものである。幅の広い解釈が可能であるため、どこまでも豊かにイメージを広げることができることばなのである。

文学的な文章においては、よく「行間を読む」ことが大切であると言われている。それは、文学的な文章では、ことばを超えてイメージが広がっていくことになるわけであるから、そのイメージを的確に把握する必要があるということである。つまり、ことばによって描かれた絵を想像する（頭の中で描くことができる）ことが大切なのである。(1)で述べた「場面の様子」とは、このようなことばが解釈されてイメージ化された（頭の中に一枚の絵を描いた）ものであると言える。

### (4) 「物語」を演じること

このような「物語」を演じることをとおして「想像力」をはぐくむことになる。なぜ、演じることが、「想像力」をはぐくむことにつながるのでしょうか。

文学的な文章の読みは、同化・対象化・典型化という三つのプロセスがある。上記のように、「物語」は、主人公の「変貌」の過程を表した三つの「場面」で構成されている。第1場面と第3場面において、主人公は大きく価値観が転換していることになる。「物語」において同化することとは、場面に応じた価値観の転換を、主人公と同じように心情体験することである。そして、その同化した自己を「対象化」して眺めることになる。これは、価値観の転換に対して自分自身の考えを持つということになる。その結果、今までの自分の価値観との葛藤が起り、これからの自分自身の生き方に影響を与えていくことになる。これが「典型化」である。1で文学的な文章を読む意義は「自己の成長」「自己再生」にあると述べたが、この三つのプロセスをとおして、それはなされていくと言えるのである。

この三つのプロセスにおいては、「物語」の主人公と「同化」できるということが何よりの基本となる。「物語を演じたりすること」は、この「同化」を促すことになる。『小学校学習指導要領解説国語編』では、幼児期を「体験活動が中心の時期」とし、「活動と場、体験と感情が密接に結び付いている」<sup>(6)</sup>と言葉と場の密接な関連性について言及している。そして、小学校低学年の児童については、『「同じような発達の特性」をもち、『体験を通して感じたことや考えたことなどを、常に自分なりに組み換えながら学んでいる』時期」<sup>(7)</sup>であるとしている。つまり、小学校第1学年においては、実際に「物語を演じる」という体験をとおして、主人公のはじめとおわりの感情の「変貌」を想像させていくことが適しているということである。

第1学年において、「場面」について理解するということは、子供たちが自分の中で「対象化」「典型化」するための観点を持つということになる。文学的な文章を読む意義は「自己の成長」にあり、その成長は文章に仮託された主題を把握することによってなされるものである。第1学年の児童は、「場面」という観点によって「同化」した自己の感情を整理し、その感情の「変貌」（価値観の転換）の要因を客観的にとらえることができることになる。そして、そのことを「物語」から離れて考えることをとおして「典型化」していくことになる。つまり、第1学年としての自立した「読書人」になれるのである。

## 2. 幼稚園の領域「言葉」（5歳児）ではぐくむ想像力

### (1) 協同的な学びの必要性

幼稚園において、「想像力」をはぐくむ教育に係る領域「言葉」の内容は、以下のものである。

[内容] (9) 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。

『幼稚園教育要領解説』では、内容(9)について、「絵本や物語、紙芝居などを読み聞かせることは、現実には自分の生活している世界しか知らない幼児にとって、様々なことを想像する楽しみと出会うことになる。登場人物になりきることなどにより、自分の未知の世界に出会うことができ、想像上の世界に思いを巡らすこともできる。このような過程で、なぜ、どうしてという不思議さを感じたり、わくわく、どきどきして驚いたり、感動したりする。また、悲しみや悔しさなど様々な気持ちに触れ、他人の痛みや思いを知る機会ともなる」<sup>(8)</sup>とある。1で文学的な文

## 第2章 未来型のこどものことばの発達 と促進法

章を読むことの意義について述べたが、幼稚園においても、自ら文章を読むという点では異なるものの、十分に文学的な体験はできるということである。

また、「幼児は、絵本や物語などで見たり、聞いたりした内容を自分の経験と結び付けながら、想像したり、表現したりすることを楽しむ」<sup>(9)</sup> ともある。文学的体験において最も基本となる「同化」体験についても、その素地は備わっていると言える。よって、「幼児期においては、絵本や物語の世界に浸る体験が大切なのである」<sup>(10)</sup> とあるように、将来自立した読書人になれるように、十分に浸らせる体験を重ねていくことが重要になってくることになる。

それでは、「対象化」「典型化」についてはどうであろうか。同じく解説には、「幼稚園で教師や友達と一緒に聞いたり、見たりするときには、皆で同じ世界を共有する楽しさや心を通わせる一体感などが醸し出されることが多い」<sup>(11)</sup> 「教師や友達と共に様々な絵本や物語、紙芝居などに親しむ中で、幼児は新たな世界に興味や関心を広げていく」<sup>(12)</sup> とある。幼稚園児にとっては、小学生のように「場面の様子」を観点としてひとりで「対象化」したり「典型化」したりすることは難しいと言える。友達が想像したことや表現したことに照らし合わせることによって初めて自分が「対象化」されることになり、そこから「典型化」がなされるのである。

中教審答申『子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について』(2005年1月)においては、「教育内容における接続と改善」として「協同的な学び」を提唱している。文学的体験における「協同的な学び」の意義は、発達の過程では困難な「対象化」「典型化」を可能にしてくれることである。そして、そのような幼稚園における「協同的な学び」が、小学校における教科教育の個人の学びにつながってくることになる。

### (2) 幼稚園における「物語」のことば

1 (3) において、「物語」のことばについて述べた。幼稚園においては、発達の過程として「対象化」したり「典型化」したりすることは難しいように、文学的な文章の幅の広いことばを読んで(聞いて)イメージを広げていくことは難しい。

幼稚園においては、「物語」の読み聞かせなどでは絵本を用いることが多い。これは、絵本という表現手段は、絵によって本来ことばでイメージされる感情表現等のイメージが補われているものだからである。

これが小学校になると、教材という挿絵が数枚入る程度のもに変わっていくことになる。幼小連携指導を考えていくには、絵本と教材をどのようにつなげていくのかを考えなければならない。幼稚園における絵本の情報量は「絵≧ことば」であり、小学校における教材の情報量は「絵<ことば」である。つまり、幼稚園において文学的な文章に用いられていることばについて考えさせていくには、絵にあってことばにないところを読む(絵を読む)ことが大切になる。具体的には、絵のみの情報の箇所からその絵に応じたことばを想像させていくということである。これは、文学的な文章に用いられることばの解釈(行間を読むこと)の前段階であると言える。

### (3) 「物語」を演じること

本研究グループは、群馬大学教育学部附属幼稚園の4歳児が『おおきなかぶ』を演じたVTRを視聴する機会を得た。この劇は、『おおきなかぶ』の読み聞かせの後、興味を持った14人の子が集まって考えたものであるということであった。配役は、おじさんとおばあさんの役は無く、まごが2人、いぬが3人、ねこが3人、ねずみが3人、かぶが3人というものであった。配役以

## 第2章 未来型のこどものことばの発達 と促進法

外はストーリーに忠実で、特に、かぶを引っぱる全員が「うんとこしょどっこいしょ」と声を合わせるところ、かぶ役がそれに対応して「まだまだかぶはぬけません」というところなど楽しそうに演じていた。

1 (4) で、幼児期は「体験活動が中心の時期」であり「活動と場、体験と感情が密接に結び付いている」ものであると述べた。小学校第1学年の「演じる」ことは、幼児期からの発達の連続性から来る流れであった。当然、幼稚園においても「演じる」ことによって「想像力」をはぐくんでいくことが大切になってくる。

この4歳児の劇を「想像力」をはぐくむという観点から見ると、自分の興味関心に応じて、自分が「同化」したい登場人物に「同化」していることになる。まさに、発達の過程に即した文学的体験の導入であり、「想像力」をはぐくむための教育の第一歩と言えるものである。

これが5歳児において「物語」を演じるとなると、4歳児と同じようにはならない。確実に、ことばは発達してきているからである。5歳児では、「同化」の質が深まっている必要がある。この深まりとは、本質的な文学体験の前段階になっているということになる。つまり、小学校第1学年のそれに連続している必要がある。そのためには、主人公の感情の「変貌」に「同化」させていくという体験をさせていく必要がある。

### 3 幼小連携の方向性

#### －「おおきなかぶ」(幼稚園5歳児－主に領域「言葉」・小学校第1学年「国語科」)－

##### (1) 発達の過程に即した指導の在り方

第2節と同様に本節においても、幼小の教員の具体的な理解のために、教員向け研修資料を作成した。(実際の研修においては、第2節と同様の流れになるため省略するものとする)

まず、物語の構成要素である構造とことばについて考えていく必要がある。今まで述べてきたことを整理すると次頁のようにまとめられる。

## 第2章 未来型のこどものことばの発達 と促進法

		5歳児（年長）	6歳（小1）
構造	場面	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主人公に「同化」することができる</li> <li>・「対象化」「典型化」は困難である。「協同的な学び」によって気づいていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主人公に「同化」することができる</li> <li>・「場面の様子」を把握する力を身につけることによって、自ら「対象化」「典型化」できるようになる。</li> </ul>
ことば	解釈	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文学的な文章に用いられることばの解釈は困難である。</li> </ul> <p style="text-align: center;">↓</p> 絵にあってことばにないところのことばを想像する 例：ねこまで引っぱったのにぬけなかったかぶの上で登場人物が休んでいるところの絵 <p style="text-align: center;">↓</p> 「ぬけないねえ」「もうあきらめようか」というがっかりしている様子を表すことば	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文学的な文章で用いられることばの解釈がある程度可能になる。</li> </ul> <p style="text-align: center;">↓</p> ことばにあって絵にないところの絵を想像する ＊言葉単位ではなく、場面単位で想像する 例：ねこまで引っぱったのにぬけなかった場面（第1場面）の「それどもかぶはぬけません」ということば <p style="text-align: center;">↓</p> 『かぶのまわりで登場人物ががっかりしている様子を表す絵』
	繰り返しリズム	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵とことばが生み出すハーモニーを楽しむことができる。</li> </ul> 例：「うんとこしょどっこいしょ」の繰り返しのおもしろさを体感する	<ul style="list-style-type: none"> <li>＊質が高まっていく</li> </ul> 例：「まだまだ」「やっぱり」等のことばの違いをリアリティをもって感じる

### (2) 研修のための指導計画

以下に指導計画を示す。

題名： 『おじいさんになってみよう』（幼稚園5歳児・小学校第1学年共通）

教材： 『おおきなかぶ』（幼は絵本、小は教科書教材文）

ねらい： 幼稚園5歳児

- ・『おおきなかぶ』について、主人公に同化することによって親しみ、友達と協同しながら想像を広げていく。（内容9）

目標： 小学校第1学年

- ・『おおきなかぶ』の三つの場面の様子について、主人公の心情の転換をもとに想像を広げながら読む。（読むことウ）

## 第2章 未来型のこどものことばの発達 と促進法

### 活動の流れ

幼稚園5歳児・小学校第1学年共通			
活 動		指導上の留意点	
1、『おおきなかぶ』の読み聞かせを聞く。 2、グループ劇をすることを知る。  3、役割のローテーションを決める。  4、劇のせりふを考える。  5、グループごとに劇を行う。		<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼は絵本、小は教材文による。</li> <li>・日常の生活グループ（5人程度）が望ましい。</li> <li>・劇にする箇所は三つ、「おじいさんがひとりでかぶをぬいたがぬけなかった箇所」「ねこまで加わったがぬけなかった箇所」「ねずみが加わってぬけた箇所」であることを確認する。</li> <li>・<u>全員が主人公であるおじいさんの役をすることが原則となるローテーションにする。主人公以外で足りない配役がいてもよいことを確認する（足りない場合は絵や人形で代用する）。</u></li> <li>・せりふを言うのはおじいさんだけであること、その他の配役は「うんとこしょどっこいしょ」を動作に合わせてかけ声をかけるのみであることを確認する。</li> <li>・ナレーター（地の文を読む）は先生が担当することを知らせる。</li> <li>・<u>幼の場合、絵にあつてことばにない箇所（「ねこまで加わったがぬけなかった場面でかぶの上でみんながすわりこんでいるところ」「かぶがぬけた箇所でみんながよるこんでいるところ」等）を示してせりふを考えさせる。</u></li> <li>・<u>小の場合、ことば（「まだまだ」「やっぱり」等）から絵を想起させてせりふを考えさせる。</u></li> <li>・全員が主人公を演じることができるように行う。</li> </ul>	
幼稚園5歳児		小学校第1学年	
活 動	指導上の留意点	活 動	指導上の留意点
6、グループ劇の発表会をすることを知る。 7、グループの代表を決めてせりふを考える。 8、グループ発表会をする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ひとりの代表者を決めたら、その<u>せりふはみんなのせりふをもとに考え直していくことを確認する。</u></li> <li>・自分たちのグループのせりふと「<u>どのグループがどのように違うか</u>」をよく見るように指示する。</li> </ul>	6、各グループの劇を振り返り、主人公の転換を把握する。 7、物語の基本構造を知る。 8、「主人公の転換」の要因を考える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・せりふの違いから、物語の構造の基本となる「<u>主人公が転換すること</u>」を把握させる。</li> <li>・6で把握させた「<u>主人公の転換</u>」が基本であることを図式化して説明する。</li> <li>・なぜ6で把握したように転換したか（「<u>主人公の転換の要因</u>」＝主題）を</li> </ul>

## 第2章 未来型のこどものことばの発達 と促進法

<p>9、各グループの発表を振り返る。</p> <p>10、どうしてかぶが抜けたのか考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>気づいた違いを発表させる。</li> <li>各グループのせりふを類型化し、物語の構造の基本となる「主人公が転換すること」(あきらかけていた・がっかりしていたおじいさんが、最後までがんばった・とてもうれしくなった等)にもふれていく。</li> <li>自由に発表させる。</li> <li>物語の構造の中核となる「主人公の転換の要因」(=主題:みんなでちからをあわせた・あきらめないでがんばった・ちいさなものでもなかまにいられた等)にもふれていく。</li> </ul>	<p>9、物語の「場面」について理解する。</p> <p>10、主題について考えを深める。</p>	<p>考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>7の図式化に8を加えて、<u>物語は三つの場面が基本になることを視覚的にわかりやすく説明する。</u></li> <li>「ねずみが一番力持ちですか」と発問し、人物の力関係を考えさせる。</li> <li>「もう少し大きなかぶで、おじいさんとねずみの間にもうひとり登場させるとしたらどこにだれを登場させますか」と発問して、<u>力のないものもそれを合わせることによって大きな力になることを考えさせていく。</u></li> </ul>
--	--	---	--

\* 「指導上の留意点」の下線部は、「ねらい」「目標」に大きく関わるところである。

### 注

- (1) 浜本純逸「他者の生を生き自己の生を探求する」『月刊国語教育 No231』、東京法令出版、2000年、13頁。
- (2)-(4) 市毛勝雄 「読解指導の方法としての授業の筋道」『教育科学国語教育No404 臨時増刊』明治図書出版、1988、180-182頁。
- (5)(6) 文部科学省『小学校学習指導要領解説国語編』、東洋館出版社、2008年、105頁。
- (8)-(12) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』、フレーベル館、2008年、149頁。

\* 幼小同一教材による指導計画を作成するにあたっては、この計画をもとにして、実際に幼小の教育現場で実践して頂いた。実践に協力頂いた幼稚園・小学校は以下のとおりである。

<幼稚園>

群馬大学教育学部附属幼稚園・白組(5歳児) 指導者 上林千秋教諭

<小学校>

群馬県前橋市立荒牧小学校1年4組 指導者 安藤哲也教諭

ここに厚く御礼申し上げます。